一手一つ

2015年（平成27年）
10月1日
第4号

天理医学技術学校同窓会報
発行所:〒632-0018
奈良県天理市別所町80-1
天理医療大学内
天理医学技術学校同窓会事務局
TEL: 0743-63-7811
www.teniko-dousoukai.jp

教祖年祭と天理医学技術学校

天理医学技術学校　同窓会長
市村輝義
（二期生、現関西医療大学保健医療学部教授
元天理医学技術学校副学校長）

明年1月26日には、教祖（おやさま）百三十年祭が教会本部で挙行されます。年祭時における天理医学技術学校の対応について辿ってみます。

教祖80年祭の年の4月に天理よろづ相談所（憩の家）が開所され、その翌年に天理医学技術学校の前身の天理衛生技師学校が高等看護学院とともに、開校されました。

教祖90年祭時（1976年）には、すでに天理医学技術学校と改名されており、その時の在校生は7～9期生で、丁度、「憩の家」の総合診療棟が完成し、日本では最も早く総合診療が開始されました。本校学生は、年祭期間中の1月26日から2月18日まで「年祭ひのきしん」として3年生は、臨床病理部で、2年生は臨床病理部と病棟で、1年生の男子は保安、女子は託児所、病棟、医務課でひのきしんが展開されました。

教祖百年祭（1986年）には、90年祭と同じように1月24日から2月20日までの間、「年祭ひのきしん」が17～19期生の手によって行われました。臨床病理部や交通整理がその中心でした。特に3年生は国家試験を間近に控え、大変心配をしましたが、4年ぶりに全員合格を果たし、「ひのきしんのお陰・・・」と感謝したものでした。その後、全員合格が5年間続き、45期生までの30年間に787人が受験し、771名が合格（98.0%）、全員合格も20回を数えました。この「年祭ひのきしん」がそのきっかけとなったことは言うまでもありません。

教祖百十年祭（1996年）、教祖百二十年祭（2006年）は、年祭も1月26日のみとなり、年祭参列のみで、特にひのきしんは行われませんでした。しかし、恒例になっていました「こどもおぢばがえりひのきしん」だけは、第7期生（1973年）から45期生（2013年）まで天理教教義学実習の一環として全員が全力で熱心に取り組んでくれました。その後の人生の上に大きな礎になったことと思います。

明年の1月26日は教祖百三十年祭です。天理にお引き寄せいただいた元一日を想い、是非、天理へお帰り下さい。お待ちしています。

平成26年同窓会事業報告・会計報告

平成26年4月1～平成27年3月31日までの活動報告をさせていただきます。

一、役員会議開催

次の通り、計1回開催した。

○第1回役員会

会期：平成26年5月17日
15時～16時30分
場所：天理医療大学305研究室
出席：市村、木寺、森嶋、長岡、小松
欠席：福田、脇本
会議内容
①閉校記念式典終了に関する報告
②44期生同窓会費入金、学生自治会寄付金の報告
③「一手一つ」第3号の内容の検討
閉校式特集号とする。

二、閉校記念誌発送

「閉校記念誌　天理医学技術学校47年の歩み」が天理医学技術学校教員により編集された。印刷・製本は天理教時報で行った。平成26年11月18日に、ゆうパックで全同窓会員へ発送した。梱包は、同窓会役員（木寺、小松）を中心に、天理医療大学臨床検査学科3年生29名、谷口恒輝さん（44期）、八木美智子さん（40期）の協力を得て、のべ6時間かけて作業を行い、同日郵便局へ手渡した。

発送総数1221通。

三、「一手一つ」第3号発行

前年度3月22日に行われた、「天理医学技術学校閉校式」の特集を組んだ。当日のフォトギャラリーを掲載した。発送時期は閉校記念誌と同じとした。

四、同窓会ホームページの更新

http://teniko-dousoukai.jp/

一昨年、長岡幹事によりリニューアルされたホームページを3回更新した。アクセス総数２８２９回（９月１日現在）

五、Facebookの更新

オープンアクセスページに閉校式の案内と当日の様子、閉校記念誌発送連絡等の書き込みを行った。

クローズドページ（Facebookユーザーの同窓会員限定用）には、閉校記念式の様子、役員会議開催、検査技師就職募集案内、閉校記念誌発送の様子などの書き込みを行った。登録ユーザー100名あり、随時募集中である。（９月１日現在）

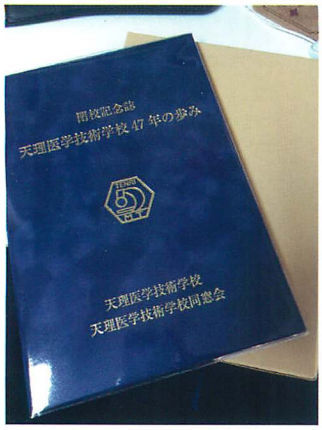
六、平成26年度会計報告

平成26年度は下記表通りの収支となった。

閉校記念誌に関するお知らせ

閉校記念誌がお手元に届いていない方は同窓会事務局へ連絡して下さい。

komatsu@tenriyorozu-u.ac.jp（小松）



閉校記念誌表表紙

天理医療大学生による閉校記念誌の梱包作業風景

ゆうパックに包装後の閉校記念誌　合計1221通分

平成26年度会計報告

収入の部

前年度繰越金	3, 737, 454
同窓生寄付金	1, 060, 000
利息	594
合計	4, 798, 048

支出の部

HP管理料（¥2, 625×4月分）	2, 625
HP管理料（¥2, 700×11ヶ月分）契約料変更による	29, 700
同窓会会報「一手一つ」印刷代	27, 750
振込手数料	324
閉校記念誌発送用コピー用紙代	906
郵送用名前用ラベル代	4, 635
ゆうちょ口座入金用用紙印刷代	1, 402
閉校記念誌発送用封筒代	7, 564
手数料	108
寄付金入金お礼用はがき代（¥52×250枚）	13, 000
閉校記念誌印刷代	2, 064, 000
次年度繰越金	2, 646, 034
合計	4, 798, 048

私たちが過ごした思い出溢れる実習地
『憩の家』の近況

天理よろづ相談所病院　臨床検査部主任
第21期生　北川孝道

施設の紹介

公益財団法人天理よろづ相談所病院は、天理よろづ相談所病院（外来診療棟、入院棟）、白川分院の２医療機関で構成されています。外来診療棟は、平成18年１月16日にオープン、明るい吹き抜けの空間は患者様にとっても安心感を与える造りとなっています。入院棟は、平成26年２月３日にオープンした東病棟・西病棟（５１２床）そして、従来のおやさとやかた西棟の南病棟（３０３床）、平成15年７月７日にオープンした白川分院（１８６床）の１００１床で構成されています。東西病棟は外来診療棟の北側に建ち、連絡通路により外来診療棟と

平成26年度　寄付金入金者一覧　268名 総計1,060,000円

多くの同窓生の皆様から寄付を賜り誠にありがとうございました。
寄付金収入の全額は、閉校記念誌印刷代の一部に充当させていただきます。

1期
楳田 高士
高橋 良子
鈴木 静子
加藤 廣子
高橋 芳江
中崎 利彦
野田 慶徳
船橋 志津香
三宅 清子
松田 陞

2期
市村 輝義/礼子
岡田 雅幸
木田 光雄
阪井 照子
東馬場 文世
増田 喜一/美也子
中村 逸枝
宮西 節子

3期
松村 益江
重田 多美恵
石出 麗子
松下 ゆり
浜崎 淑恵
重田 裕司
柴崎 定男
小西 道子
田巻 眞知子
中山 泰行
吉田 徳代
井上 たまよ
森澤 正代
徳重 安美

4期
宇都宮 築子
金城 佐登志
巽 義美
吉田 四男美/恵三子
文澤 幸子
松阪 淳
山田 秀子

5期
五十川 静男
猪口 直子
楫ヶ瀬 孝
石川 百合子
笹田 健好
山本 淳子
菅沼 みき
赤堀 和子
西岡 旬子
橋口 由紀子
三浦 久吉
田中 京子
山下 歌子
今井 竜子

6期
宮村 恵美子
上木 正成
高橋 のぶ子
成田 満理子
梶田 まち子
筧 洋子

7期
辻ノ上 久美子
竹内 真由美
大河内 睦子
八田 陽子
大河内 宏幸
中田 茂
安田 正利
若月 明美

8期
今田 千鶴
岡山 幸成/邦子
岸本 佳代子
中山 邦子
奥村 敦子
今田 隆子

9期
倉内 典子
木寺 英明/きみ子
鴻池 資啓

10期
今井 教嗣
中西 淑恵
谷口 良子
瀧本 順三郎
飯田 緑
前川 宜子
光村 純代
萩原 長子
橋本 匡子
堀江 ひとみ
南　義弘/睦
中田 眞知子
弓場 富喜子

11期
戸田 順子
白本 里美
宮本 なおみ
在長 和廣
内田 律子
田上 美鈴
藤原 敦子
持田 恵美子
大平 啓江
村松 宗子
森川 加代子
越智 由佳里

12期
豊田 茂美
森下 政重
菊田 多恵子
高田 穂波
井上 あけみ
柳田 広子
奥山 和代
兼長 真澄
原田 譲
藤本 一満/宜子
田中 佐代美
尾藤 和代

13期
中 眞弓美
新谷 寿美子
森田 真美
金谷　領
近藤 和子
福塚 勝弘
松本 郁子
佐藤 京子
久保 良子
山岸 眞代

14期
木村 知美
高田 章美
土屋 直道
吉村 さゆり
橋本 儀一/敏枝
小林 浩子

15期
大林 準
林田 雅彦
三角 由美
福田 悦子
山下 宗人/貴代
梶 孝依

16期
阿比留 仁
西　律子
高垣 理恵
松下 陽子
琉 健二/幸代

17期
阿部 洋士
川崎 佳代
岸原 文江
佐々木 幸代
服部 香
真下 照子
奥宮 美由紀
森井 均

18期
森下 由美子
清松 佐知子
岡崎 哲也
菅 三佳
幸田 晴康/みどり
村田 育代
大月 陽子
横田 洋
三枝 光代

19期
神田 典尚
西村　雅
菅田 君子
花岡 治恵
高田 みづき
竹岡 加陽
二重 実
上田　睦子
安藤　薫
谷口 暢子
森嶋 良一

20期
坂本 真一/よう子
藤田 美晴

21期
伊藤 文枝
小川 令子
北川 孝道
吉川 佳子
福西 佳容
永谷 道一
前川 ふみよ
宮本 和子
福田 優子

22期
太田　奈津子
高田 純子
大河原 まつよ
桑野 彩
大原 奈里
榎本 恵美
栗岡 明子

23期
植田 隆史/千晶
池上 多加子
谷口 京美
原田 博子

24期
中川 美穂

25期
椿　直美
小倉　登
松本 智子
山崎 善夫
仙田 ちとせ

26期
植東 ゆみ
関本 奈奈
松田 江身子
和田 昌巳

27期
小林 昌弘
山本 智恵美

28期
古川 雅也

29期
北田 佳代
松田 裕美子
小林 和代

30期
曽山 奉教/あかね
辻沢 里依

31期
岩根 文男
樋川 理恵

32期
平松 小百合
中澤 務/浩世
花尻 康人

33期
天野 陽子

36期
千枝 貴幸

37期
今村 あい

38期
林　将生
諸井 ひろみ
吉岡 明治

39期
石川 豊
石谷 彩

40期
髙橋 明徳
八木 美智子

43期
谷口 恒輝

44期
北川　歩
成田真奈美
松岡 直子
山崎 宏之

45期
黒田 教太
高橋 陸
馬場 創汰
原田 孝馬
土方 一輝

専攻科
上田 奈三
森本 達也

行き来が可能となっています。

臨床検査部の紹介

臨床検査部は、現在１３５名が所属し、医師２名、臨床検査技師97名（管理職３名、検体検査41名、生理検査39名、病理細胞診12名、白川分院１名、受付１名）、臨床工学技士31名、事務５名で構成されています。検体検査の大半は外来診療棟で行われ、検査室は受付、採血場、検査室がワンフロアーに設置されています。一日の平均外来患者数は２０００～２５００人で多い時には８００名を超える採血を臨床検査技師のみで担当し、そのうちの８割を超える診察前検査に対応しています。臨床検査以外では、ＮＳＴや糖尿病教室、ＩＣＴ、自己血外来、時間外の救急外来支援などの業務にも従事しています。検体検査は自動化が進む中、検体検査技師ではなく臨床検査技師であることにこだわって日々の臨床検査に取り組んでいます。生理検査は外来診療棟、東病棟、南病棟にそれぞれ検査室を設置し、外来診療棟は心電図・超音波・脳波・神経機能検査室を配置、東病棟は呼吸機能・超音波検査室を配置、南病棟は心電図・超音波・脳波・神経機能・呼吸機能検査室（スパイロのみ）を配置しています。外来診療棟では、多いときで１日３００名を超える検査を行っています。検査室が分散したことで、検査の効率が低下、さらに来室検査が増える中で、お互いの部署が協力し合い、毎日多くの検査をこなしています。さらに近年、各分野で術中など臨床の現場で行う検査が増え高度な技術が個人に要求されるようになってきました。検査室のレベルを維持しつつ、技術の

外来診療棟（左側5階建）と新入院棟（右側10階建）

継承が行えるよう日々取り組んでいます。臨床工学技士は、血液浄化関連業務(HD)、手術室関連業務(OP)とICU/ME機器関連業務(ICU/ME)の3セクションで業務を担当しています。HDは東棟透析室・ICUおよび南棟透析室で血漿交換、末梢血幹細胞採取、LCAP/GCAPなど様々な血液浄化装置の操作、管理を行い、OPは手術室、さらにペースメーカ外来、心カテ、内視鏡センターなどで自己血回収装置、人工心肺装置の操作、ダヴィンチやナビゲーション装置の準備介助、麻酔器やモニタ、内視鏡関連装置、ペースメーカなど各種機械に対応しています。ICU/MEは主にICU、病棟、外来、用度課などでPCPS、ECMO、低体温療法、CHDFなど持続的治療とME機器の保守管理を行っています。人工呼吸器は来室による使用中動作点検や検査中、治療中の対応も行っています。

白川分院（療養病棟、リハビリテーション病棟、精神神経科等がある）
南病棟-外来診療棟-新入院棟-白川分院を巡回するバスが出ている。

臨床病理部から臨床検査部へ

平成25年4月病理診断部の設立により、臨床病理部から臨床検査部に名称が変更されました。これは臨床病理部という名称が、病理診断部と間違えやすいと懸念され変更することになりました。初代部長の高橋浩先生は「くりぱそ天理」の中で、臨床病理部という名称の意味について、『これまで臨床検査部門はただ依頼された検査項目のデータを返せば足りるとい考えが多かったが、もはやそれは許されなくなった今日、改めて臨床病理部を名乗る意味を重く思う。臨床病理部は検査診断の精度を高めると共に新しい診断法を開発することを日々研鑽を積まなければならない』と述べられています。私たちは、名称は変わっても、この思いを常に心して取り組まなければならないと思っています。

伝統的な学生指導

天理医療大学も開校から4年目を迎え、1期生は昨年の後期に臨地実習、そして今年の前期に卒業研究を終え、医療大学となり始めて病院での実習を終えました。当初は、世の中が学生主体となる教育の中で、朝早くから夜遅くまで病院に残り学生と向き合う、いわば天理医学技術学校での伝統的な実習がはじまるのか、バイトの時間に実習を合わせることも必要となってくるか、実習形態はどのように変わるのか心配でした。しかし、遅くまで学生と向き合う姿を検査室でよく見かけ、学生も真剣に取り組んでいたように思われました。4年制教育となり、実習に来る学生も1つ歳を取っているのか、バイトを通じて人付き会いに慣れているのか、しっかりしている学生が多いようにも感じられました。どちらにせよ、一対一の熱心な指導はなんら以前と変わらず、天理医学技術学校から続く伝統的な学生指導は継承されていると思われます。

天理医学技術学校時代の実習施設。新入院棟建設により南病棟という名称へ変更。
現在、微生物検査室、病理診断部、各種生理機能検査室が配置されている。

天理医療大学の近況

天理医療大学 医療学部
臨床検査学科 助手
第40期生 八木美智子

私は天理医学技術学校40期生として卒業後、病院で約4年間勤務し、昨年4月より天理医療大学で助手としてお世話になっています。本年度をもって、全学年が揃い、完成年度を迎えました天理医療大学についてご紹介させて頂きます。

天理医療大学は1つの医療学部とそれに属する看護学科と臨床検査学科より構成され、特に1回生では両学科共通科目が多く、授業や学校生活において学科間で深い交流があります。私が携わった授業として、例えば「医療実践基礎実習」という科目では、入学して間もない時期に天理よろづ相談所病院へ見学実

習に行き、その後グループディスカッションをします。両学科の異なる視点によりディスカッションの内容も深くなり、学科間で情報共有する大切さも学んでいきます。また、「感染とその防御」という科目では、体表面や水回り、発酵食品のグラム染色および鏡検を行います。看護学科向きの実習構成ですが、検査学科の学生にとっても専門科目として微生物学を学ぶ前に「興味」を持つきっかけとなる面白い実習です。実際、1年次は知識を詰め込んでばかりだった自分自身と比べると、はるかに広く興味や疑問を持っており、感心するばかりです。

設備としては、検査学科棟3階に実験室が3つ新設され、教員や卒業研究生が日々研究を行っています。また、1階には学生ホールや売店、ブリッジ下にはテラスといった大学らしい設備も少しずつ充実してきました。学習環境システムとしてはe-learningが整備され、シラバスや講義資料の提供、確認テストなどをWeb上で行っています。初めは「勉強はノートとペンやろ！」と思っていましたが、利点も非常に多く、学生には今後も有効活用してほしいと思います。

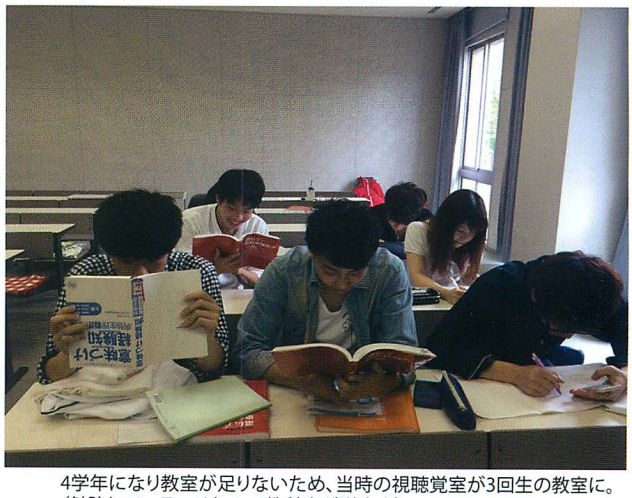
このようにカリキュラムや設備が新しくなる中、学生の雰囲気も変わったのではと聞かれることがありますが、みな相変わらず芸達者ですし、やはりどこかお道の匂いのかかった、天理に導かれて来た学生達だとつくづく思います。1期生は「医技校の先輩方がやっていたように、学年を超えて交流する！」といって新歓や運動会を開催したり学生広報部を立ち上げたりと、後輩とともに新しい大学を盛り上げてくれています。来年は、いよいよ大学として初めての卒業生が巣立っていきます。他の大学生とは違い、天理医学技術学校生と同じように温かく厳しい臨地実習や研究実習を経験した学生達ですので、卒業後はさらに全国各地の施設や技師会などで、皆様にご指導頂ければと思っております。

1回生の看護学科との共通科目『感染とその防御』の実習風景。
小松先生（23期生）指導のもと、看護学科の学生もグラム染色を実施中。

臨床検査学科の交流会。先輩と後輩の繋がりを大切にする姿勢は、今も変わらず。

当時の職員室は学生ホールに改装。学生の昼食や勉強、くつろぎの場所となっている。

新設されたブリッジ下のテラス。天気の良い日は、賑やかな声が聞こえます。



4学年になり教室が足りないため、当時の視聴覚室が3回生の教室に。
（勉強しているフリなので教科書が逆向き）。

御恩報じの十四年間

天理教本枇杷島分教会会長
元天理よろづ相談所病院臨床病理部
第5期生 青木健裕

私は5期生（旧姓西）です。昭和48年4月「憩の家」に入所。昭和58年8月末退職致しました。その後、教会生活を続けています。平成11年に市村先生より学生に天理の教えを教会長の立場で話してほしいとのお話しを頂き、御恩報じと思い、快く引き受けました。それから14年間、名古屋から感謝の心を持っておぢばに帰らせて頂き、平成25年6月8日最後の御用を無事終えました。

最初に「いんねん」という話をします。このクラスは親神様の不思議なお引き寄せ、縁があってこの時に、このメンバーで、そして、この場所（おぢば）に集まっているのだと自覚を促し、そして、身内の誰かが、あるいは、お友達が病気になったときには、神殿に行き、お願いの参拝をして欲しいとお話を進めます。そして、このお道が、身上（病気）たすけに医薬を大事にして、そのおたすけにどのような心を使い、苦心、工夫を重ねて、心の成人を願っているのかを、身近な所から話しかけました。

今想い返すとお話しの合間に、一人ひとりに研究発表の内容を聞き、言葉を交わして会話をつなげている時には、まだ自分が現役で「憩の家」で検査を行っているかのような錯覚に落ちました。最後には、日々を感謝して勇んで笑顔を忘れぬ態度で明るくつとめさせて頂こうと自分に言い聞かせていることですとお伝えして終了です。

5期生、6期生の朝礼風景（旧　天理中学校講堂にて、昭和47年）

昨年の閉校記念日に私は、大切な理の御用をつとめながら、遠くからおぢばを拝しておりました。そして、立派な閉校記念誌を作成頂き、関係の皆様方、誠に有難う存じます。

最後に、卒業生の皆様、来年1月26日は教祖百三十年祭当日です。第二のふるさと「おぢば」に共々に帰らせて頂きましょう。

文化祭。5期生、6期生女子による合唱披露。（昭和47年10月28～30日）

現 奈良県立医科大学附属病院
中央臨床検査部
元 天理よろづ相談所病院
臨床病理部主任
第6期生 大峠和彦

突然に、同窓会誌『一手一つ』連載の「コラム」への原稿依頼が来ました。「原稿内容は特にテーマはありません。経験、現状、同窓会への思いなど」という内容で同窓会長の市村先生からのメールでありました。すぐに了承しましたと、返信しましたが、さて何を書けば良いか・・・。とりあえず、今、私がしている仕事について現状などを書きます。

昨年の1月末を持って天理よろづ相談所病院を定年退職となり、その後、再雇用で臨床検査部に残っておりましたが、10月で退職いたしました。今は、奈良県立医科大学付属病院中央臨床検査部特殊検査室で働いております。実は、ちょっとした宴会の席で奈良医大のメンバーと同席となり、「僕も定年になったよ」と話をしていたら、その後、遺伝子検査

を手伝ってほしいと電話があり、昨年の4月から週1回、遺伝子検査を手伝うことになったのです。奈良医大の遺伝子検査は、数年前から技師2人で検査をしていた様ですが、その内の1人が退職したため、残りの担当技師とその技師が不在の時に抽出操作を手伝っている者が2名ほど居ましたが、色々と問題が起こり困っているとの事で、手伝う事ななったのです。今年4月からは、久々に本格的に遺伝子検査の実務に就いております。奈良医大では造血器腫瘍の遺伝子検査として、WT1mRNA定量、BCR/ABLmRNA定量を月に約20件程度検査しており、その他ウイルスDNA検査として、EBウイルス、サイトメガロウイルスDNA定量検査を月に5件程度、実施しております。また、感染症学教室と共同で細菌の遺伝子配列を利用して菌種同定を行う仕事も始めています。新しく、Rotor-GeneQと言うリアルタイムPCR装置が導入される予定です。これから、前述の4項目を新しい機器に導入するための検討が待っています。有難い事に色々と課題があり、まだまだゆっくりとは過ごさせてもらえない様です。

4期生、5期生のキャンプ。（滋賀県相生、昭和47年7月26～29日）左側は高橋浩先生
夏のキャンプの伝統は、医技校閉校の年、45期生まで続きました。

定年を迎えて思うこと

元 天理よろづ相談所医学研究所
第8期生 奥村敦子

私は、この度、7月末付けにて定年を迎え、退職させていただくことになりました。入所以来、約39年間、公私に渡り多くの皆様にご指導ご支援を賜り、何とか無事定年を迎えることができ、感謝とお礼の気持ちで一杯です。

振り返れば、42年前、資格が取れるということだけで天理医学技術学校に入学し、四苦八苦しながらも卒業、1977年4月に憩の家に就職、臨床病理部の生化学部門に配属となりました。半年を過ぎ、ルーチン検査にも漸く慣れてきた頃、突然、医学研究所で欠員が出たとのことで異動を命じられました。医学研究所の予備知識は全く無く、元の部署への未練の気持ちが残り不安の中、新しい職場に勤務するようになりましたが、今から思えばこの時は、臨床検査技師としての私のライフワークとも言える、その後27年間携わった「染色体」に出会えた岐路であったと思います。

医学研究所へ入った当初は、アミノ酸分析や外注検査の窓口、研究される先生方の補助等を行っていましたが、その後1986年、細胞培養室が整備され、業務内容が大きく変わっていきました。造血幹細胞移植、抗癌剤感受性検査等も携わりましたが、最もウェイトを占めたのは、白血病やリンパ腫の染色体分析検査で、経験を重ねるほど、臨床に貢献でき、やり甲斐のある検査と実感していきました。1997年には、染色体異常を遺伝子レベルで判定できるFISH検査を導入し、2006年には、日本染色体遺伝子検査学会を天理で開催するという貴重な経験もできました。今では、染色体自動解析装置やM-FISH解析装置も用いるようになり、染色体に初めて出会った頃に比べ、飛躍的に進歩した事を今更ながら喜ばしく思います。そして、改めて思うのは、いつも私の周りには、困った時、相談でき支えていただいた人達がいてくださり、そのお蔭で今日の日を迎えられたということです。染色体を見ると、つい時間の経つのを忘れて飽きずに眺めてしまっている自分を発掘できた、あっという間の充実した39年間でした。本当に有り難うございました。

最後になりましたが、皆さんのご健勝と更なるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

旧校舎における授業風景（8期生、昭和52年）

九州の地で思うこと
～つながり～

福岡徳洲会病院
臨床検査科技師長
第18期生　﨑田光人

天理医学技術学校第18期生として卒業し、今年で28年が経ちました。九州福岡から天理に行き、男子寮の親里1号館で過ごした日々が懐かしく思い出されます。3年生の夏に、故郷福岡で活躍されていた天理の先輩を訪ねて病院見学に行ったことがきっかけで、昭和62年4月に福岡徳洲会病院に入職し、現在に至っております。これまでに天理の後輩2人の入職もあり、天理の「縦のつながり」を感じております。

この「縦のつながり」こそ、天理の教育環境が生み出した財産であり、検査技師人生においてかけがえのないものであります。学生や若い技師に聞いて驚くのは、同じ学校でも同期以外との交流が薄く、先輩や後輩をあまり知らないということです。天理は全く違います。学生時代に一緒だった先輩後輩は皆覚えておりますし、今でもお会いすることがよくあります。同窓会名簿を見て、近くに住んでいるからと、突然訪ねて下さった先輩もおられました。検査技師としての最高レベルの技術・知識だけでなく、人と人とのつながりも得られるということが、天理で学ぶ最大の魅力でありましょう。

私が所属している徳洲会グループの良い所は「横のつながり」です。「生命だけは平等だ」との理念のもと、断らない医療を実践しており、目標達成のためにたすけ合います。現在、全国のグループ病院のうち5施設の検査責任者が天理の卒業生です。九州に於いても天理の影響力は絶大で、出身校が天理というだけで一目置かれることさえあります。これも天理の歴史と伝統、素晴らしい教育の賜物であり、卒業生として誇りに思います。毎年、同窓の検査責任者と一堂に会したときは、必ず天理の話題で盛り上がり、ここでも縦と横のつながりを改めて実感いたします。

最近思いますのは、大切なのは「人」ということです。患者と職員、職員同士のつながりを重視し、相手を慮る意識を持てば、たとえ大変な業務でもやり甲斐や喜びを感じることが出来ると思います。世の中が病んでいると言われるこの時代こそ、「医療ようぼく」の力の見せ所ではないでしょうか。

第18期生の皆さん（卒業アルバムより、昭和62年）

第18期生卒業時の職員の方々（卒業アルバムより、昭和62年）

編集後記

秋空も美しく、学び舎周辺の広葉樹も赤らむ頃となりました。校舎の前には、憩の家新入院棟が建設され、隣にある外来棟と共に人の出入りで賑わっています。天理医療大学では、第1期生が来年2月24日に行われる第62回臨床検査技師国家試験へ向けて猛勉強に励んでいます。そして3月12日には学位授与式を執り行い、大学に移行して初めての卒業生を送り出すことになります。

来年1月26日は教祖百三十年祭が盛大に執り行われます。またとないこの機会に、懐かしき母校がある「おぢば」に是非お帰り下さい。

同窓会事務局（23期生）小松　方

元天理医学技術学校校舎、現在はB棟と呼ばれている。